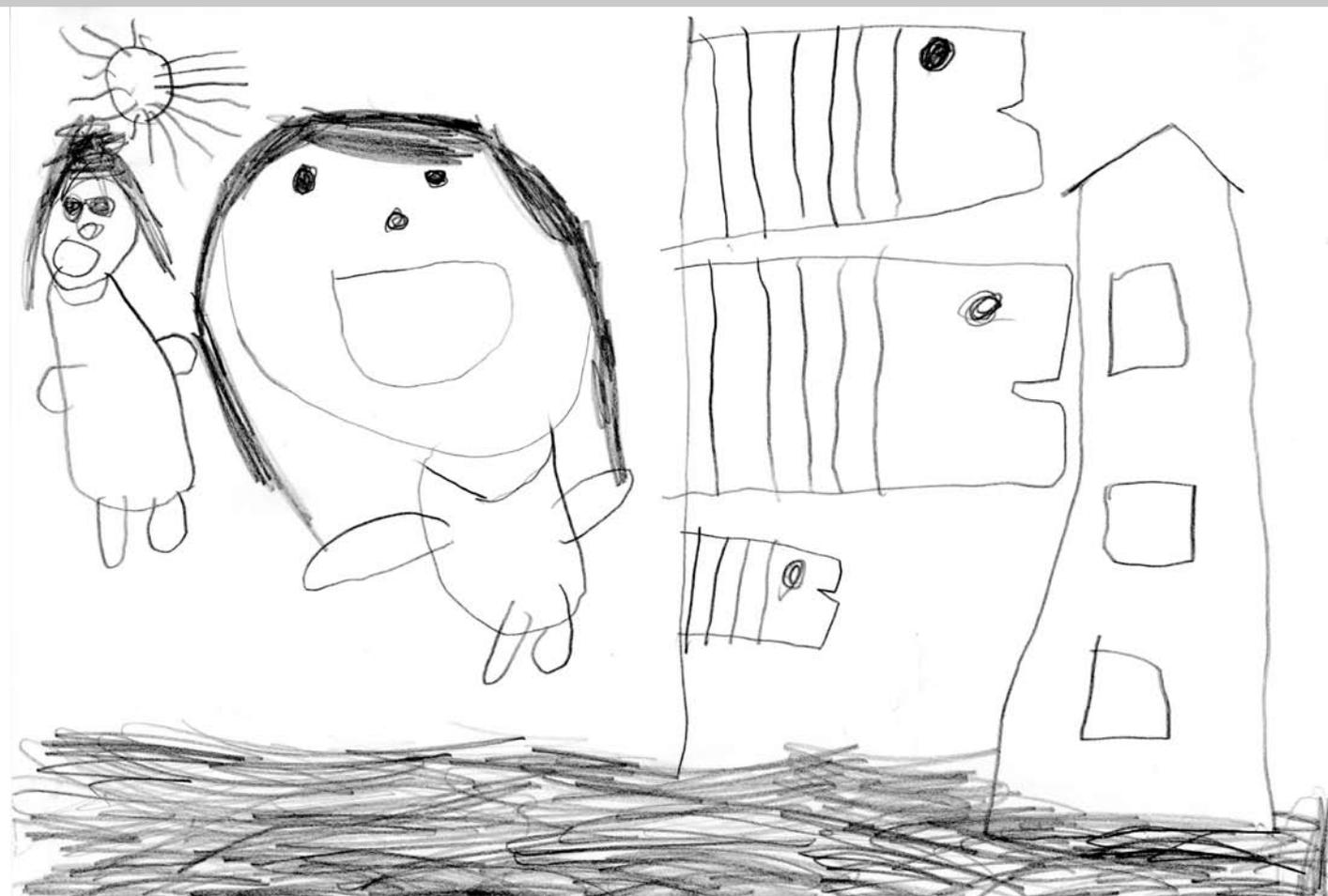


保育北九州

平成27年5月1日
発行 (一社)北九州市保育所連盟
〒805-0019 北九州市八幡東区
中央2丁目1-1
(レインボープラザ5F)
電話 (093)661-2153番
発行人 平 沢 茂
編集人 日 野 真人

2015 179



いっしょに泳ぎた~い!

〈提供 八幡東支部〉

(4歳児の作品)

表紙	1
視点・視点と私	2~3
橘原淳信先生インタビュー 第2弾	4~5
研修報告	6~7
雑感・編集後記	8

北九州の保育を「保育の良心として」

視 点

昭和五十七年、当時「保育北九州」の編集長であった内藤知徹先生の要請に応えて綴り始めた視点の執筆を今回をもって終える。

機会を与えて下さった内藤先生、拙文を読み続けて頂いた皆様に心からお礼を申し上げます。

六十余年、保育一筋の人生で主張し続けてきたのは、保育という営みが、やがて「良き市民」となる人間の根っこを育てるものであり、そのことが、人々を幸せにする街づくりに繋がるものと信じ、変容する社会・経済の中にあつて、如何なる時代であろうとも欠落させてはならない「保育の質」についてである。

ところが今年度から施行された「子ども・子育て新制度」は、子どもの最善の利益を謳いながら大人の利便性優先で子どもへの心遣いが全くなされていまいかに思われる。

最終執筆にあたり、保育を業とする者が確認しておきたいのは、人間の子どもは生れながら自ら育つ力がプログラムされているが、そのもつ力が発揮されるためには、乳幼児期の命と心の脆弱性を十分認識し、常に彼らの欲求を満たし、愛されていることを実感させてくれる大人の存在があつて始めて「人間っていいな」と人を信じ心が安定することが前提となる。

又、子育ての原型は始めの一步にあるといつても過言ではない。即ち人の子は一部例外を除いて必ず二本の足で立ち歩くようになる。その理由の一つは周りの人たちが二本の足で歩くというモデル

視点と私

◎視点と私

花かご保育園

中村 尋子

昭和五十七年五月（三十八号）〜平成二十七年五月（二七九号）まで三十四年もの長きにわたり視点の原稿を執筆していただきました。五月号が最終回とお聞きし、誠に寂しい気がいたします。いつかはこのような時期が訪れるだろうことは誰しも感じていました。「口述筆記をしますので続けてください」と言えば藤岡先生から「いつまで頑張ればいいの!」と言われそうですが……心底そんな気持ちです。

時には体調のすぐれない日もおありになったことと思います。しかし、原稿を遅れて出すのはいやだから、といつもメ切より前に提出されるとお聞きしています。感性シリーズの出版のときも原稿を依頼しましたら誰よりも早くお書きくださいました。しかし、本文の編集が遅れてご迷惑をおかけしたこともありました。

思い起こせば北九州市保育士会の研究研修の開催場所は西日本銀行北九州支店や富士銀行北九州支店・弥生会館などで行われたものでした。現在はレインボープラザで行われることが多いですが、一昔前は決まった研修場所はありませんでした。

保育所連盟五十周年記念として保育北九州に掲載された視点を一冊の本にまとめることが決まり、たまたま編集部の委員を命ぜられた関係で視点の編集をさせていただきましたが、改めて視点のどのページをめくっても当時のことが思い出されます。本日に長年執筆いただきありがとうございます。

◎新しい時を曳く

金田保育園

山下 諒子

平成二十七年度の「始まりの式を迎えた」金田保育園は、昭和五十年に開園。当時の理事長西村法昭初代園長西村良樹、北九州市長谷伍平の三氏によって、桜の苗木が植えられた。その桜の苗木は、保育園の子どもの「笑顔」に微笑み、「泣き声」に悲しみ、「はしゃぎ声」にとどめき、四十年子どもと共に「笑顔満開」の時を刻んできた。地域の「宝物・金田の一本桜」として咲き誇っている。

この桜の木をこよなく愛した人がいる。昨年十二月に亡くなられた西村良樹先生でした。先生は、北九州市保育所連盟の三代目の会長、全国私立保育園連盟の会長でした。情に厚く、北九州の全ての子どもの福祉（しあわせ）を父上と同じように広い心で念願しておられた。

「視点」―視点はいつも、子どもたちの―著者藤岡佐規子先生を姉上のように尊敬している第一人者でした。藤岡先生が執筆された昭和六十年五月三十一日「明日、花ひらく者のために」安積徳也の詩「明日」について、西村先生を忍び引用する。

はきだめに、えんどう豆咲き
泥沼から蓮の花が育つ

人皆に、美しき種子あり

明日、何が咲くか

平成二十七年「子ども・子育て支援制度」が始まりました。これからの保育をめざす私たちは、子どもの生きる力の基礎を育み、明日花開く子どもと共に凛として、新しい時を曳く保育者でありたい。

があること。二つ目には立とうとする時、必ず支えてくれる人やものがあること。三つ目には始めての立っち・あんよを共に喜び・共感してくれる大人がいる。だからこそ彼らは、やる気いっぱい歩こうと猛烈に自らにトレーニングを課す。

愛されている喜びが人間を信じ、心の安定を得て、やる気を起し、思いやりをかけられて他者への思いやりの心が育つ。

この根っこが育つ時の、「保育の質」が大切にされない結果は？根っこが朽れば葉も繁らず、花も咲かず、実もみのらない。

「保育の質」を確保する第一の条件が、豊かな人間性と専門的知識・技術を持つ子育てについて唯一の資格者である保育士の存在である。子どもの育ちの援助(保育)と保護者の子育てに対する援助(保育指導)の二つを業とすることを法で定められた資格であるにも拘わらず、速成栽培されようとしていたり、子どもの育つ条件(屋内外の面積など環境要件)への配慮がなされず、更には日々送付される小規模保育事業参入必勝伝授、年収〇〇円、月実益〇〇円など、機を捉え、保育を営利の目的とする企業のFAX攻勢に怒りはピークである。

かつて一三五号に引用したように、エリック・シユローサー著の「ファーストフードが世界を食いつくす」と同様、激烈な安売り、徹底した顧客ニーズ調査、それに応じた戦略の数々…と述べられた森上史朗氏の保育学会会報を再読して欲しい。

北九州市保育所連盟が行政と共に構築してきた北九州の保育を「日本の保育の良心」として誇りをもち、「視点はいつも子どもたち」と大きく叫び続けて頂くことを心から願っている。

永い間有難うございました。

藤岡 佐規子

唯一無二にして 希有なる『視点』の視点

れんげ乳児保育園

黒田 玲子

「保育北九州」の巻頭を飾る藤岡先生の『視点』が、三十四年間の幕を閉じることになったと聞き、本当に淋しい思いが致します。

私は平成のはじめに八年ほど、江田正行先生、西村良樹先生、北野一恵先生の三人の編集長の下で、保育北九州の編集に携わらせて頂きました。発行前に視点を読むのが楽しみだったことを覚えています。

私が感嘆したことは、藤岡先生がお忙しい中ただの一度も締め切りに遅れることなく、むしろ誰よりも早く視点原稿を書き上げ渡して下さったことです。これは誰にでもできることではありません。藤岡先生の偉大さの第一点です。

第二に視点のタイトルがどれも秀逸なこと。タイトルを辿っていくだけで、保育の歴史、時代の変遷が一目でわかります。そして一貫して子ども、保育、保護者、そして国や市行政に向けられる藤岡先生の姿勢が示されています。

時には温かく時には厳しく、子どもを第一義にと訴えられるこの『視点』の視点こそが、唯一無二にして他の追随を許さない希有なる「藤岡先生の『視点』」になり得たのではないかと思います。だからこそ誰にも代われない『視点』として、歴史の幕を下ろされるのでしょうか。

長い間私たちが進むべき道へ灯火を照らして下さいましたことに、改めて心からお礼の言葉を申し上げます。

視点を初めて読んだ日

保育北九州編集長

日野 真人

私が二十七才で保育(保育士)として西教寺乳児保育園に入職したのは昭和六十三年九月のことでした。ちょうど今の年齢の半分の頃です。試験を受け資格こそ取得していましたが、現場でやっていたのか、と不安なまま保育に携わるようになった頃でもありました。そんな時に保育北九州誌上において「視点」を初めて読んだのです。

——親たちはフレキシブルな対応を求めている——

昭和六十三年十月第七十三号

このような見出しが目を引きました。北九州でも九か園が定員を減らすことになったと記してあり、続いて、これによって生じた空き保育室の活用方法について言及されました。また、「制度による制約の中で、社会や親たちの求めるものに応える道は何なのか保育所連盟構成員の一人ひとりが考えなければならぬでしょうし、会長のリーダーシップによる道の打開にも期待したいものです」とも書かれていました。保連や保育士会のトップの人たちはこのようなスケールの大きな考え方をするのかと驚かされました。そして今、当時の視点を読み返してなおも驚かされるのが、そこに書かれていることがまったく古びていないことです。この昭和六十三年十月の稿を、そのまま新制度が始まった現在に於いて掲載しても「なるほど」と頷かされるばかりだと思います。視点の連載が終了することはとても寂しく思いますが、そこで伝えられようとしたことは色褪せることなくこれからも受け継がれていくはずです。藤岡佐規子先生、長い間、本当にありがとうございました。

内閣府
子ども・子育て
会議委員

橋原淳信先生 インタビュー第二弾



平成二十七年四月から子ども・子育て支援新制度がスタートしました。これまでの制度（とにバラバラな政府の推進体制を整備する為（内閣府に子ども・子育て本部を設置）に平成二十四年八月から「子ども・子育て会議」が設置されました。これは国、有識者、地方公共団体、事業主代表・労働者代表、子育て当事者、子育て支援当事者（子ども・子育て支援に関する事業に従事する者）が、子育て支援の政策プロセス等に参画・関与することができる仕組みとして設置されたものです。この会議に北九州市私立保育園連盟会長（全国私立保育園連盟副会長）の橋原淳信先生が子育て支援当事者として委員に選ばれ参画されておられたのはご承知の通りです。いよいよ新制度がスタートするにあたり、橋原先生にお話しを聞かせていただきました。

文中（橋原）
内閣府 子ども・子育て会議委員

文中（日野） 保育北九州編集長
橋原淳信 先生

（日野）お忙しい中、時間を割いて頂きありがとうございます。本日もNHK名古屋が橋原先生の保育園に取材にいられているとお聞きしております。

（橋原）当保育園への取材という

（日野）詳しく教えていただけないでしょうか？

（橋原）新制度では保育士等の資格を持っていないくても、三十時間の研修を受け二日

間の実習を行えば「子育て支援員」資格を与え、小規模保育所B型では職員の二分の一を保育従事者として当てる事が出来るというものです。

（日野）えっ？ では保育士の足りないB型小規模保育所では職員の二分の一まで、その短時間で養成された「子育て支援員」を保育従事者にして良いとされるのですか？ これまで保育士の方々が培ってきた学識や経験、それに調査研究に基づく保育を、そのような形にしては……。橋原先生、これは大変な問題です。

（橋原）そうですね。北九州市には小規模保育所B型は一園もありませんが、これは北九州市にないからよいとはなりません。先達が作り上げてこられた保育を護るために、委員であるからとか関係なく、われわれはほとんどん声をあげていかねばならないでしょう。

（日野）橋原先生、新制度が始まるにあたって、他にもこれ

から考えていかねばならないことを教えてください。

（橋原）PDCAサイクルという言葉があります。経営学理論の一つであるのですが、これはものごとを、1計画(plan) 2実施(do) 3点検評価(check) 4改善(adjust)の4段階で捉えるのです。つまり新制度が実施されてからも、その内容を常に点検評価し改善につなげていくことが必要なのです。

（日野）制度が始まったからもうあとはやっていくだけ、ではないのですね。

（橋原）先達の方々は、戦後の焦土の中、何もなしの中から立ち上がり、子どもたちの養護と教育のために血の汗を流して今日の保育を作り上げてきました。その方々の御苦労を考える時、目先のことだけやればよいではなく、まないと考えています。

（橋原）また社会福祉法人改革も



新制度と同時に審議されています。これもまたわれわれ保育者にとって刮目せねばならぬことです。

(日 野) 具体的にはどのようなところが組上に載っているのでしょうか？

(橋 原) まず課税の問題、次に評議員会の設置、そして退職共済への補助廃止などが上げられるでしょうか。その他にも多くのことが審議さ

れています。今申し上げた三点が重点的に審議されているようです。

(日 野) 課税の問題は企業の福祉事業への参入を受けての、イコールフィッティングという論点で審議されているのですか？

(橋 原) われわれ保育の世界では考えにくいのですが、社会福祉法人の中には十数億もの巨額な剰余金を持っているところもあるようです。このために、社会福祉法人にそれらの剰余金をもって地域公益活動を促そうとの動きもあります。これは課税も視野に入れた、剰余金の公益への還流という考え方であろうかと思えます。

(日 野) 評議員会の件、現行の理事會制度だけでは駄目だとなるのでしょうか。

(橋 原) 今出ている話では、理事會は業務執行に関する意思決定機関とし、評議員會は法人運営の基本ルールと体制を決定する議決機関とする、という流れになっています。

(日 野) ということは会社組織にたとえるなら理事會は社長以下の役員會、評議員會は株主總會ということになるのですか。

(橋 原) 理事會の恣意的な運営に歯止めをかけるという考え方は理解できなくもないのですが、しかし社会福祉法人——保育園の設立経緯を考えると、一方的な改革が果たして良い結果を生むのかと危惧してもおります。また退職共済への補助の廃止も、その金額の大きさから施設運営に大きな影響を与えると考えられます。当面の補助廃止は見送られるようですが、議論そのものは続けられるようですので注視しているところです。

(日 野) 新制度施行から社会福祉法人改革——戦後最大ともいえる社会福祉制度の転換期なのですね。ますます子ども・子育て會議委員である橋原先生の双肩にその重責のしかかると思えます。申し訳なくも有り難く存じます。

(橋 原) じつは、わたしはこの四月八日で子ども・子育て會議委員を退任することになりました。二十五年四月より子ども・子育て會議委員として各種會議に三十六回出席させていただきました。

(日 野) 橋原先生は高熱が出ていても、保育園の代表として欠席してはならぬ、と子ども・子育て會議に皆勤されたと聞き及んでおります。

(橋 原) 西村法昭先生や西村良樹先生、藤岡佐規子先生らが保育のためにと長い間頑張ってこられた道をわたしも歩ませていただきました。しかしこれからは若い先生方に大いに期待したいと思えます。新しい考えや情熱を持った若き力が北九州保育関係者にもたくさんいます。どうか、力の限り頑張っていたください。

(日 野) 先達の方々が切り拓かれた保育の道をわたしたちも歩んでいきます。橋原先生、本日はありがとうございました。

以上文責 保育北九州編集長 日野真人
平成二十七年三月二十四日保連応接室にて

研修報告

第41回全国保育士研修会



平成二十七年
二月十二日、
十三日の二日間
千葉市東京ベ
イ幕張ホールに
て「施行間近か
の新たな制度に
関する理解を深
めるとともに、

実践すべき保育・教育について考える」又、「主任保育士やリーダー的職員に求められる役割について」という主題で研修会が開催されました。一日目は厚生労働省保育課長朝川氏より新制度の予算・子育て関連3法・保育士確保プランなど社会保障の充実と安定化について学びました。シンポジウムでは「乳幼児期における教育について考える」のテーマで三名の先生方が「養護」と「教育」を保育にどう取り入れるかと発表があり、子どもの育ちは日々の保育と家庭生活の積み重ねで、それが養護と教育につながり、切っても切り離せないものであると学びました。二日目のコース別研修では「保育所における人材の育成」に参加させていただき、職場における良いチームづくりとは保育士間のコミュニケー

ションが大事であり、その中でリーダー的保育士及び職員が、保育所内での問題点を事前に把握し、改善点を共に考えていこうとする姿勢が大切である事を学びました。研修を終えて今後は、新制度に向けて諸々の改正点の理解と、保育の質の向上だけではなく、社会の変化も視野に入れた保育士間のチームワークづくりに頑張っていこうと思います。

若竹保育園

澤井育子

第32回北九州市保育士研究研修会

平成二十七年二月十七日に「いま、子どもたちのために、何を、どうすべきか」を主題とした第三十二回北九州市保育士研究研修会が開催されました。初めに北野久美会長により、全国保育士会の動向や本市の取り組みについて基調報告がありました。又、調査部の虐待に関するアンケートについて、前年度と比較しての報告、研究部の排泄の調査の経過報告があり、保育士会のプロ意識の高さと組織力を感じることが出来ました。午後からは、中京大学の鯨岡峻教授による小倉北ふれあい保育所と浅川保育園の実践発表に対するコメント及び記念講演があり、子どもと接する保育者の心の在り方や子どもの心を育てる



上で、「養護の働き」ばかりではなく「教育の働き」も重要であることを学びました。今後も子供の思いを受け止めつつ、教え導く「教育の働き」を大切にしながら「子どもの最善の利益」につながる保育を実践していこうと思いました。

白野江保育園

蜂谷将邦

第32回一日保育士体験者懇談会

平成二十七年二月三日小倉北区リーガロイヤルホテルに於いて一日保育士体験者懇談会が開催されました。北九州市保育士会北野久美会長、北九州市保育士会藤岡佐規子名誉会長、北九州市保育所連盟平沢茂会長のご挨拶をいただきました。各区代表の方の体験発表があり「男性がもつと体験してほしいと思う」などの感想があり、その後「今の子どもに育ってほしいことのようなことですか」というテーマのグループ討議を行いました。環境・食育・生きていくための力など有意義な意見交換がありました。最後に北野会長より、北九州市保育士会四十年の報告、二十七年からはじまる「子ども・子育て支援新制度」についての説明をしていただきました。



さかい川保育園
布住好江

(一社)北九州市保育所連盟
(公社)北九州市私立保育園連盟
北九州市保育士会へご寄付
西村 法 昭 頭 彰 会

社会福祉法人鳳雲会 理事長 西村幸子 様より西村良樹先生のご逝去に伴い、保育事業発展のため多額のご芳志を頂戴いたしましたので、ご報告申し上げますと共に心からご冥福をお祈り申し上げます。

(一社)北九州市保育所連盟
(公社)北九州市私立保育園連盟へご寄付
北九州市保育士会

(一社)北九州市保育所連盟 平沢 茂 会長より、ご令室様のご逝去に伴い、保育事業発展のため多額のご芳志を頂戴いたしましたので、ご報告申し上げますと共に心からご冥福をお祈り申し上げます。

(一社)北九州市保育所連盟
(公社)北九州市私立保育園連盟へご寄付

八幡西区 藤田保育園 園長 後根 泰定 様よりご母堂様のご逝去に伴い、保育事業発展のため多額のご芳志を頂戴いたしましたので、ご報告申し上げますと共に心からご冥福をお祈り申し上げます。

支部近況

第5回 若松区篇

若松は、北九州市内で面積では、七区の真ん中に位置するのですが、人口密度は一番低い、ちよつとゆつたり感のある区です。そのような環境の若松支部の保育園は、十四園とこじんまりとした構成です。そのため毎年、新年度の総会では、若松区の保育園に新規採用された職員、異動で若松区に勤務することになった職員のすべての保育士・調理員が、一人ひとり自己紹介を行い、若松支部の一員になったことを他園の方々に知って頂きます。人数が少ないので可能なことですが、そのことを通して「若松で働くぞー」という一体感が生まれるようです。

そんな若松支部は、年に二回全体研修を行っています。各園から選ばれた保育士委員が中心となり、どのような研修を開催してほしいか、保育園ごとの意見を出し検討します。毎回、多彩な講師の名前があがり、迷ってしまうくらいです。今までの研修の主なものを紹介させていただきます。職員の心身の健康維持の

ために、リンパマッサージの先生をお迎えした時は、タオルを片手にリンパの正しい流れに沿って、足・腕・首など自分が気になるところを特に重点的に気持ちを込めてリンパ液を流していきましました。研修を終えるころには参加の保育士皆が「それはとても美しくなってる?」心も体もすっきりしました。



また時には、保育園で音楽指導を下さっている牧村恵子先生をお招きして、『歌って心も体もリフレッシュ』と銘打ち、子どもたちへ素敵な歌声を聴かせるために「まずは保育士から」ということで、発声練習。



腹式呼吸で「ア・ア・ア」。喉で歌うと喉が潰れますが、腹式呼吸で遠くへ声が届くように歌うと大丈夫です。腹式呼吸の正しい方法を知るために若い保育士さんは牧村先生のべたんこの脇腹に手を当てさせていただき、本物の腹式呼吸を体感しました。めったに出来ない体験でした。

その他にも、「プロの歌声を」ということで、「きたきゅうの歌大賞」に輝いた『ひまわりの歌』の作者である富永裕輔さんを特別ゲストに迎え、ミニコンサートも開きました。本当に間近でのピアノの弾き語り、素敵な歌声に会場のみんなが魅了されました。心和むひとは、明日からの保育への意欲になりました。

また、保育にすぐに活かすことのできる「体操研修」では、青山紫郎先生をお迎えし、まずは準備体操、体育館の中で思いっきり体を動かしました。そして「運動会に向けての運動遊び」ということで、一人から始まり六人までの色々な組体操を教えて頂きました。気持ちは若い「若い」もエネルギー溢れる「若き」も、みんな楽しく生き生きと取り組み、その成果は各園運動会で見事、披露されました。

このように若松支部は、いつも子ども・保育士のために、を考えながら運営をしています。これからも楽しい、そして子どもに還元することのできる研修体制を組んでいく予定です!





(4歳児の作品)

おおきくなったら ケーキさん

雑

感

『子育ては親育ち』

短大を卒業した後、別の仕事をしてきた私が保育士になったきっかけは、知人からの紹介でした。自分自身、そして我が子も幼稚園の経験しかない私にとって、保育園で働くという事は新しい発見の連続でした。と同時に子どもたちと遊び、触れ合う中で保護者の方と子育てを通して付き合っていくことには、たくさんの戸惑いがありました。最初の頃は、自分の子育てをしてきた経験を話したり、私の思いを保護者の方と共有しようとしたりすることが多かったような気がします。時には考え方の相違から通じ合えず、どうしたら私の思いに同調して貰えるのだろうと試行錯誤の日々が続き、失敗の連続でした。日々の保育の中で先輩方から助言を頂いたり、研修などに参加することで「受容する」ということを学ばせていただきました。保護者の方の思いをゆつくりと聞き入れる大切さを感じるようになりまし。そんな保育士生活を過ごす中で、ある保護者から「先生がたくさん話しを聞いてくれたおかげで、突っ張ってばかり

の私がやっとお母さんになれた」と言われました。私の心の中はなんともしえない気持ちになり言葉にできない感動を受けたことを今もはっきりと覚えています。保護者を受け入れる大切さを身をもって感じることで、保育士になって良かったと実感した出来事でした。

私も、良い親になろうと力を入れず、どんな時も我が子の成長を見守る中で、たくさんの回り道をして、帰ってくる所はあるよと手を広げて待つていられる親でありたいと思っています。

私はこれからも、保護者と同じ目線に立つことを心掛け、笑顔でいつまでも変らぬ気持ちで過ごしていきたいです。まだまだ保護者との関わりで後悔することもありますが、これからの保育士生活の中で少しでも花開いていくことができるように、日々初心を忘れず積み重ねていきたいと思っています。

高坊保育園

榎野 文子

編集後記 — ひとつのおとに —

＜ひとつのおとに／ひとつのこえに／みみをすますことが／もうひとつのおとに／もうひとつのこえに／みみをふさぐことに／ならないように＞谷川俊太郎『みみをすます』より。

新制度が始まりました。制度の骨格をなすのは子育て・子育ちへの崇高なる願いであるはずですが、どうすれば子どもたちの健やかな成長を支援していけるのか、どうすれば保護者への有効なる支援を行えるのか。多くの方々の叡智を集めて練られた願い——施策であろうかと思えます。しかし制度を実行するにあたって忘れてはならないことがある、と谷川氏の詩は教えてくれます。だれの声に耳を傾けるのか。そのときもう一つの声は耳に届いているのか。とても難しく、不安が募ることかもしれません。ですが、肝に銘じておきたい。「もうひとつのこえにみみをふさぐことにならないように」と。

「保育北九州」編集長 日野真人